

Title	被爆地フクシマに立つ教会：マオ博士の講演に対する被災地からの応答(第二回東日本大震災国際神学シンポジウム：分科会報告 B)
Author(s)	川上, 直哉
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.56, 2013.10 : 125-133
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/repos/modules/xoonips/detail.php?item_id=4923
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

被曝地フクシマに立つ教会

マオ博士の講演に対する被災地からの応答

川上直哉

本稿において私は、マオ博士の講演との対話を通して「被曝地フクシマの神学」を模索したい。この神学は神義論を含みこみ、教会と傷ついた社会との関係を取り扱う神学となる。

マオ博士の講演のように、過去、三重の災害を蒙った東日本大震災を取り扱った神義論構築の試みは複数為されてきた。それらへの応答を、この小論で試みてみたいと思う。過去の議論における成果は、「神の位置の移動」と「終末論の位置の移動」として確認される。これらの成果を批評する中で、我々は「悲劇の中の祈禱論」を展開することができる。

結論はこうである。すなわち、悲劇の中での祈禱論は、主の祈りの意味を新たに開き、弱さの中にゆるし（赦し／許し）の神を顕現し、悲劇の中にある社会との関係の中で教会の意味を我々に捉える機会を与えるものとなる、ということである。

1.

本稿において、我々はマオ博士の講演への応答を行いたい。被曝地フクシマの神学を求めて、悲劇の中での祈禱論を議論したいと願うことである。あるいは、被曝地フクシマのような傷ついた社会と教会の関係について議論を喚起すること。それも、本稿の目標である。

2.

「自然災害」と「人災」の両方を含みこむ神の摂理として悲劇を抉出する——この困難な課題を適切な仕方成し遂げること、マオ博士の講演は成功している。この成果は我々の議論の出発点として貴重なものである。

その上で、マオ博士の講演に対して、私は一つの疑問を抱く。真の祈りは絶望を含みこむのだろうか、という問いである。マオ博士が指摘しているとおり、旧約聖書は悲劇の中での祈りについて、よい例を示している。旧約聖書に基づき、マオ博士は、私の質問に対して「そうだ、真の祈りは絶望を含みこむのだ！」と、その講演の中で大胆に語っている。私は彼の力強い信仰に満腔の敬意を覚え、彼の主張に一片の真理があることを認める。⁽¹⁾しかしそれでもなお、私はこの結論に完全に同意できるかどうか、躊躇する。

徐々に、被曝地フクシマの状況は明らかになってきている。甲状腺の異常が、五〇人以上の子どもたちに確認され

た。多くの母親たちが、深い不安の中にいる。これが被曝地フクシマの現状である。この現状の中に、教会がある。果たしてどうやって教会は、苦しむ犠牲者たちに、祈りには絶望が含まれ得ると、語れるのだろうか。我々は、悲劇の中の祈禱論を模索しなければならなくなった。私はそう感じている。

3.

悲劇の中での祈禱論の模索。この課題を前に、私は二人の神学者を思い出す。張允載博士と、中澤啓介博士である。

二〇一二年一月六日、会津で開催された「原子力に関する宗教者国際会議」⁽²⁾において、張博士は注目すべき講演を行った。会議に参加した仏教者を深く感動させたその講演は「核から解放された世界への脱出／出エジプト」と題している。⁽³⁾この講演において、原子力爆弾と原子力発電所はコインの裏表の関係にあることを、張博士は正しくも主張している。また我々は、彼の講演から「脱出／出エジプト」という良い言葉に学ぶことができる。正しく核の問題を見つめるとき、我々はどうしても、自分たちが核の奴隷であることに気づかずにはおれない。二〇世紀の神学を参照しつつ、『新しい核の時代』を指摘したゴードン・D・カウフマンとサリー・マックフェイグの神学を越えて行こう」と張博士は語る。苦しむ犠牲者（たとえば被曝者）に焦点を当てること。そして、苦しむ犠牲者の許にいて我々をそこに呼び出すやハウエの神に焦点を当てること（出エジプト記三章一五節を参照）。そうした視点を得るために、張博士は韓国神学の伝統を参照する。すなわち、民衆神学である。この講演を聞いた参加者はすべて、博士から多くを学んだ。私はこの講演への質問として、張博士に次のように訊ねた。どうやって我々は苦しむ犠牲者と共に悲劇の中で祈ることができるだろうか？ 彼は私の質問の意図を深く理解し、共にその答えを探そうと、私を励ましてくれた。

中澤啓介博士は、東日本大震災の後、神義論を扱った講義を、東京で二回行った。⁽⁴⁾彼は「神学者の無責任」を指弾し、我々は一七世紀からやり直さなければならぬと主張する。一七世紀以来、ライプニッツのような哲学者によって、新しい思想的潮流が現れてきたからである。そして中澤博士はヴォルテールのように、一七五五年のリスボン大地震によって提起された神義論的問の深みに目を向け、この間に適切な回答を与えた神学者は未だにいない、と言う。そして、我々は創世記とヘブル書を新たに解釈しなければならないと彼は主張する。「神との共同管理者」という概念を打ち建てつつ、彼はある種の自然神学を提示するのだ。あるいは、この主張は「核の時代の神学」の新しい型を提示しているのではないか、という懸念も提示されるかもしれない。しかし私は、彼の議論が未来に向けた貴重な取り組みであると確信している。その上でしかし、私は彼に一つの疑問を抱いている。彼の神義論に立つて、被曝地フクシマのような悲劇の中で、我々は祈ることができるようか、という疑問である。私はこの疑問を直接中澤博士に投げかけた。その時、中澤博士は率直に次のように答えた。すなわち、この神義論はフクシマの被曝地を含む被災現場に立つて構築したものであるが、フクシマの被曝者に向けて語るべきものとしてではなく、筆者のような若い神学者への問いかけとして提示したものである、と。そして彼は、引き続き共に考えていこうと、筆者を励ましている。

4.

ここでマオ博士と中澤博士の限界を指摘し、その克服を試みたい。両博士の到達点の意義を、我々は次のように確認することができるだろう。すなわち、彼らはその神義論において、神の位置を天から地へ移設することに成功した。彼らの神義論は、受肉の教理の展開として理解することができる。その神義論は机上の空論ではなく、苦しみの現場で生

み出された思想である。その議論は二〇世紀を終えた現時点での神義論の理想的な事例であると、私は思う。しかし、そこになお批判すべき点を私は見出す。

中澤博士の講義について述べるならば、我々はもつと正しく我々自身の歴史状況を把握しなければならないと思う⁽⁵⁾。我々は二一世紀に生きているのであつて、一七世紀に生きているのではない。一七世紀は近代主義の出発点であつた。その時代は「天才の世紀」であつた。対して我々は、近代の終わりに生きている。一七世紀、我々人類は多くの欲望を持つており、それを達成するための手段に事欠いていた。しかし今、我々は欲望を満たすための手段を、恐ろしいほどたくさん、獲得してしまつた——満たされるべき欲望はそれほど増えていないのに！そして今、我々は目的と手段とを取り違えてしまつてゐる。二一世紀になり、我々は数多ある手段を数え上げてから、自分の満たされるべき欲望は何であるかを選ぶようになってゐる。これが我々の貧相な二一世紀である。その結果、例えば我々は、自らを「核の捕囚」状態にあるものとして見出す。これは近代主義の努力の結果である。もちろん、我々は一七世紀から積み残している課題に取り組まなければならない。しかし我々はフクシマ以後の時代の課題にも、着手し始めなければならない。

マオ博士の講演についてはどうだろうか。今私はマタイ福音書五章二一節以下に展開される定式（口語訳「昔の人々に……と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。……」）を思い出す。悲劇の中において、我々は神や運命に対する怒りを抱きがちなものだ。創世記四章六節の単純な言葉がここで思い出される。「あなたはなぜ怒るのか？」これは、人生の不条理に直面した一人の男に向けられた言葉である。この言葉を思い出しながら、私は一つの問いを思い描いている。神や運命が我々を悲劇の中に陥らせることがあるとして、我々はその時、神や運命への怒りを乗り越えることができるのだろうか？

5.

私は張博士の先へも進み行きたいと思う。彼の功績は、終末論の位置を未来から現在に移設したことにある。通俗的な神学とは対照的に、そして多くの現代神学の在り方に従って、苦しむ犠牲者のいるそのただ中に、すなわちその「現在」の時に、終末を見出すこと。これが、張博士の神義論の特徴である。私たちのライフスタイルの犠牲者に、十字架につけられているキリストを、見出すこと。その位置まで彼の講演は我々を導いてくれる。そうして我々は、核に代表されるような行き過ぎた近代主義の捕囚状態からの解放を、真剣に切望するようになるのだ。これが張博士の到達点である。しかしそこに未だ欠けたところがあるような気がする。彼は十字架にかけられているキリストを提示することに成功している。しかし私たちは更に、復活したイエスをも必要としているのではないだろうか。

6.

ここでマオ博士の到達点から、再び大胆に学びたいと思う。試みに一つの問いを立ててみよう。我々は神や運命をゆるす（赦す／許す）ことが、できるだろうか？ もちろん、これは一つの冒流的な問いであろう。しかしヨハネの手紙第一は「愛は恐れはない」と言つて、我々を励ましているではないか。神をゆるす（赦す／許す）ということ。これは、挑戦するに値する冒険である。なぜか。悲劇を（敢えて）神の摂理として理解した上でその原因と目される神をゆるす

時、我々は「神の見えざる手」の上で人類が悲劇を引き起こしているに過ぎないのだ、ということに、気づかされるからだ。実際、悲劇のほとんどは、人間によって引き起こされている。しかしその時、我々はいつも、神や運命を呪う。言い換えれば、人類が互いに傷つけあう時、人は神や運命を逆恨みする、ということだ。このことにまで理解が到達する時、我々は十字架につけられているキリストを新たに再発見することができるのである。

7.

その上で、復活したイエスを探してみたいと思う。どのようにして我々は、十字架につけられたキリストの発見から、復活したイエスの発見へと進むことができるだろうか。その鍵は、悲劇の中で唱えられる主の祈りにあると思う。主の祈りにおいて新約聖書は、我々が他者を赦すとき、我々は赦す神の顕現を目の当たりにする、ということを示す（マタイ伝六章一二節）。実際のところ、主の祈りは、我々に他者を赦す告白の機会を与えることで、赦す神の顕現をもたらすのである。

マオ博士は、その講演において、忘れたいひとつのエピソードを紹介していた。ハリー・カイトルトがオランダの田舎の牧師であった時、ある悲劇に遭遇した時の話のこと。カイトルトは、その悲劇の中で自らの完全な無力さを感じたその時、その犠牲者が確固たる信仰を告白したことを聞いた、という。今回の災害において同様のエピソードを何人もの牧師が語っていたことを思い出す。こうしたエピソードは何を意味しているのだろうか。それはつまり、神は、弱さの中で、赦す者として顕現する、ということであろう。あるいは、「自らの無力が神によって赦され、無力な自分自身がそこにいることを許されている」というその信仰において、人は神の顕現を見る、ということであろう。

被曝地フクシマにある諸教会は放射能の問題に対して全く無力であるように見える。放射能の問題は巨大で深刻であり、教会はとても小さいのだ。しかし教会は、自らの弱さが神に赦され、被曝した福島に教会が居続けることを許されていることを、主の祈りの中で信じることができる。私は、被曝したフクシマにある教会が赦す神に出会おうと信じる。なぜなら、教会の弱さの中に復活したイエスが赦す神として顕現すると信じるから。このようなヴィジョンに向けて、我々は主の祈りを新たな思いで祈ることができる。このようなヴィジョンの中で、我々は再び新しく、傷ついた社会にある教会の存在意義を見出すことができる。

以上が、マオ博士の講演に対する私の応答である。被曝地フクシマの神学に向かう一步として、ここに提示する次第である。

注

- (1) W・ブリュッゲマンは旧約聖書から同様の指摘をしている。『古代イスラエルの礼拝』、大串肇訳、教文館、二〇〇八年、九四頁以下を参照。
- (2) <http://p.tl/q92K>
- (3) <http://p.tl/eHhI> 日本語訳は、<http://p.tl/pUKp>
- (4) 中澤啓介「リスボン大震災（一七五五年）の問いかけを無視してきた教会」（二〇一二年九月一六日 聖契神学校オープン

キャンパス講義1)、中澤啓介「クリスチャンは信仰的、聖書的にこの大地震をどう受け止めたらいのか——へブル人への手紙二章五〜一三節を通して——」(二〇一二年一〇月六日 東日本大震災救援キリスト者連絡会講演会)。

(5) この歴史観については、次の資料を参照のこと。今道友信『美の存立と生成』ピナケス学術叢書、二〇〇六年。今道友信

『エコエティカ』講談社、一九九〇年。